

武田軍記 卷之九
比北越ニ漂寄シ玉ヒ上杉入道謙信ヲ頼ミ越國ニ滞留アル事十六年天正十二年陸奥國ニ立越シ玉ヒシニ會津黒川ノ驛ニシテ家人坂西ト云フ者ノ爲メニ害セラレ玉フコソ痛ハシキ次第ナレ

信玄築海津城並原美濃守入道蒙勘氣事

斯テ武田入道信玄ハ信州河中島ノ内清野ガ館ヲ召上ラレ、急ニ城ヲ築クベシトテ山本道鬼ガ繩張ニテ八月朔日ニ歛初アリ同ク十月下旬迄纔八十餘日ニ普請已ニ成就シテ海津ノ城ト號ケラレ、本城ニ小山田備中守昌辰二ノ曲輪ニ市川梅印原與左衛門尉ヲ入置カレ、同ク十月春日

彈正忠ナ小室ノ城代トシテ指遣ハシ玉ヒケリ、斯ル處ニ同ク極月二日甲州ニ於テ淨土宗ト日蓮宗ト宗論出來タリケルニ原美濃守虎胤入道清岩如何思ヒケン國法ヲ背キ法華宗ノ方人ト成リケレバ信玄大ニ立腹アリ制法ニ背キシ條其罪輕カラズトイヘモ、數度忠戰ヲ挑ミ粉骨他ニ異ナル者ナレバ、死罪ヲ恩免アツテ所領ヲ沒收セラレケレバ、馬場景政内藤昌豐飯富昌景心ヲ副ヘ、美濃入道ヲ相州小田原ヘ送りケレバ、北條氏康弓矢ノ智識ヲ得タリトテ悦ビ玉フ事限リナシ

信玄出陣駿州賀島附原入道清岩働之事

てられしもの。近くに古墳あり。又布目瓦の破片など出づ。館址は長方形。門外に侍屋敷あり。

二、寺系：遠江國周知郡中田村雲林寺の末寺。

三、創立：丹波國高山寺城主荻野屋張守朝忠（彦六）正平七年丹波國人に攻められて敗走して上野國にて歿す。其子備後守常倫（通稱岩松）、兒島高德新田義治を追跡して付澁に入り、此の地に二十端城（菊田城）を築く。二十端城址は字木の下にあり。東西三十九間、南北五十三間。常倫の子倫秀都住村字下入りに在りし千僧林念佛寺を現在の地に移して梅洞山岩松院と改む。岩松とは父の通稱を採りたるもの。然して開基を常倫に追進す。

開山は不琢玄珪禪師なり。遠州雲林寺の明室覺證禪師を開山としたれども明室禪師開山の徳を玄珪禪師に追贈す。千僧林念佛寺の開山は明巖倫公座元禪師なれども其の開基は知られず。

其後元和年間福島正則高井郡に貶し岩松院を菩提寺となし寺領二十五石を寄附す。正則を中興開基となす。寛永元年甲子七月十三日六十四歳にて卒したる正則の廟は本堂の裏にあり。現在の本堂は天保二年再建されしもの。定紋は丸に二つ引と桐の二種。

當院の北に飯繩社あり。正平十二年荻野常倫守護神として「下入り」の山の西端に社を建つ。後其子倫秀念佛寺を移し岩松院と改めしより其の御靈守護の爲に院の北方に社地を擇み祠を建て鎮守とす。然して飯繩社を遷し祭る。永祿年中武田信玄の攻略に逢ひ荻野氏奥州津輕に走る。（現在當地に荻野氏なるものなし）

八 幡 原

更級郡小島田村に在り。

甲越信戦録に曰く「其の後四方の堀を極むる。夫より人夫を集め急に築立てる。勘介思ふやう後に至り千曲川瀧水せば極めて此城に水難あらん。其上今年廿にて北に當り水也。十干亦癸なれば極陰なり。然らば何れにか水を守る神を祭らずんばあるべからずと考へ、夫より武家にて尊み奉れる神は武太神也。いさや此太神を祭らばやと川中島に勧請して永祿八幡

宮と申しけり。是今にある八幡原の宮也」と。

即ち八幡宮の小祠あるに依りて其の名を付けられたものである。甲越の激戦地にして龍擾虚撃の跡も今は田園と化してゐる。宮の附近に所謂三太刀七太刀として上杉謙信、武田信玄兩雄の一騎打を爲したる遺跡がある。其の地よりは逆襲といつて麥の穂先の畸形を年々産すると云ふが不思議の現象と云はれてゐる。尙附近にある高塚は當時戦死者を葬つた場所と云はれてゐる。

海 津 城 址

埴科郡松代町にあり。

海津城は天文二十二年甲斐の武田信玄が越後の上杉謙信に備ふべく其の家臣馬場圭濃守、山本勘介入道の兩名に海津築城の命を傳へた。依つて山本勘介は普て諸國遊歴の嗣、泉州塩の隠士角隅右京から教へられた唐土築城法を用ひ、所謂後世にいふ甲州流の築城に着手した。（山本勘介信州築城の主なるものは海津城を始め小諸、高島、深志、飯田、大島等にし千曲の眞砂に曰く傳曰當城者當國第一名城也當城）起工以來八十日を以て竣工せりと傳へられてゐる。當時は土壘なりし者甲州流の築者以此城圍城取之爲手本賞之）起工以來八十日を以て竣工せりと傳へられてゐる。當時は土壘なりしが慶長三年田丸直昌城主となるに及び本丸を改修して悉く石壘となし森忠政の領主時代更に二の丸三の丸の工事が完成するに至つたと云ふ。

森氏の事 森忠政は關ヶ原役後十二万石にて移封して來たものである。本能寺の變の頃忠政の兄長可は二ヶ月餘り在城した事がある。有名な森蘭丸、坊丸、力丸は長可の弟であり忠政の兄である。長可は十六歳の初陣でしばしば功をたて剛勇父におとらず世人より鬼武藏と悼名せられたりと。忠政來城し檢地を行ひ青醋を極め毫も假借する處なし。爲に土民へ撥を起す。巨魁三人は島打峠にて磔刑せられ、與黨七百人（二百九十七人とも三千七百九十二人とも云ふ）は首を刎ねられた。長野市善光寺の傍らにある千人塚は是等犠牲者の供養を行

つた記念碑である。

量田氏の入封（元和八年）後、城郭の体裁は全く完備した。城は東南に山を繞らし、西南に笹崎及土口坂の要害あり、東北に鳥打峠の嶮を控へ其北に關附の難所あり、且つ西北は千曲川に依り要害をなしてゐる。本丸は方形にして、二の丸三の丸は圓形を造り、東西南の三方に三重の濠を穿ち、土壘を築いて重疊の外郭を設け、然も附近の神田川、關屋川何れも外濠に注ぎ甲州流築城の模範として知られた名城であつた。

寛保二年の洪水、城に慘害を與へた爲め、千曲川、關屋川を現在の地に移した。版籍奉還について明治五年廢城の止むなきに至つた。廢城と決した際朝旨を奉じて城地請取に來た者は東京鎮台第二分營上田詰の乃木少佐であつた、これが後の乃木將軍である。州地並に武器の請取が済んだ後間もなく本丸、二の丸、三の丸の樓閣門牆は取毀されて了つた。明治八年家祿奉還の土族にその土地が拂下げとなつた爲め、任意に城の石垣を毀ち、堀濠を埋め、桑麥の圃と變つてしまつた。後本丸のみ眞田氏の有となり明治卅七年に遊園地として保存せらるゝことゝなつた。海津城は本丸、二の丸、三の丸、花の丸等よりなり所謂大御門内の構へを總稱して御城内と呼び其の總面積は三方一千二百五坪であつたと云ふ。

臥 龍 山（須坂町大字小山）

一、形成は

斷崖によつて兩側が陥没し東側にはもと市川が流れてゐたが現在は南側を流れる。

一、岩石は

全山眞岩が、基底なる小紋岩（八木氏は變朽安山岩）の上をおほふ。

一、名跡として

その形狀恰も龍の臥したるが如く、全山奇松奇岩として間々櫻樹、つ、ちを交へて風光明媚、遠く千曲川を隔て、薄

光寺半を一時に望む。近時附近一萬五千坪の地を租し龍ヶ池を造つて公園とした爲同時の景色は更によい。

一、舊蹟

一、峰に古墳（ひさご塚）がある。その他一、三ある。石器なども發見された。

一、須田氏の城址

信濃源氏井上氏の一族、井上九郎源爲實小山氏を亡ぼしてここに築城、居館は今の興國寺のあたりにあつたといはれ、當時そこを須田と云つたので在名によつて須田氏を稱した。今尚城山に空墳あり、城鼻、馬嶺、的場、大手、西堀、内堀などの地名を存し、墳墓には瓦輪塔を残す。

建久年中須田貞村日瀧大岩城にうつる。

一、興國寺

曹洞宗 明應二年創立。

幕府より朱印地十九石六斗を授かる。

巨樹 臥龍梅あり、山門、經堂、鐘樓、本堂、庫裡などの大建物あり、靜寂境。

一、堀直虎公の廟

幕末維新の際、慶喜に大義を説き歸順をすゝめ容れられず殿中にて割腹した。若年寄兼外國奉行であつた贈四位直虎公の廟は堀家の廟の最も上段の地にある。中に「廣興院殿前少府令祐道靖忠大居士神儀」と刻んだ墓石がある。

一、靈坂神社（八幡）

縣社、式内社、（日本書記神武天皇記参照）

須田氏の崇敬せし神社、西に八幡長者跡と稱する處がある。

姥 捨 山

更級郡八幡村にあり。普く人口に膾炙する白濃の名所にして古歌多し。文人墨客の首として唱する勝地にして世に知らざ

ためであらう。

天正十年二月、織田信長は武田勝頼を新府城に攻めるに先立って、同信忠に命じ高遠城を攻略しようとし、盛信またよく織田の大軍と大いに戦ったが破れ、盛信以下将士はここで壮烈な戦死を遂げたことは人のよく知るところである。

武田氏の滅亡後、伊那郡を鎮定した徳川家康は、保科正直に同城を与えたが、天正十八年正直は家康に従って下総・多古に移り、代った毛利秀頼、ついで京極高知は飯田城にあって城代をおいてこの地方を領知させた。慶長六年、保科正直の子正光同様に帰り住したが、正之の時金津に移り、寛永十三年島居忠春が城主になったが、元禄二年島居氏は改易となった。元禄四年内藤清長が城主となって以後は、その子孫が代々城主をつぎ、明治維新に至った。

高遠城跡は、三の丸および二の丸につづく補助曲輪を除く大部分が残存していて、城跡の規模を知ることのできるえがたい遺跡である。

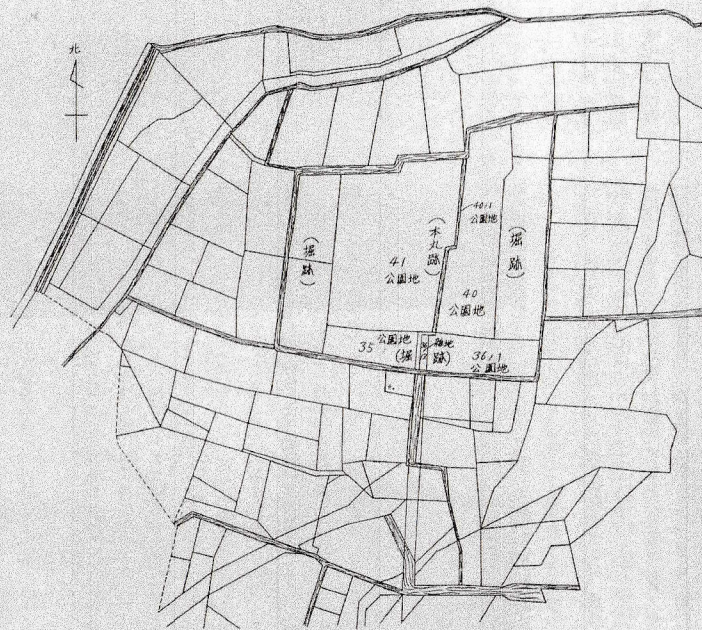
松代城（海津城）跡

所在の場所 長野市松代町松代
交通 信越線松代駅・長野電鉄線松代駅

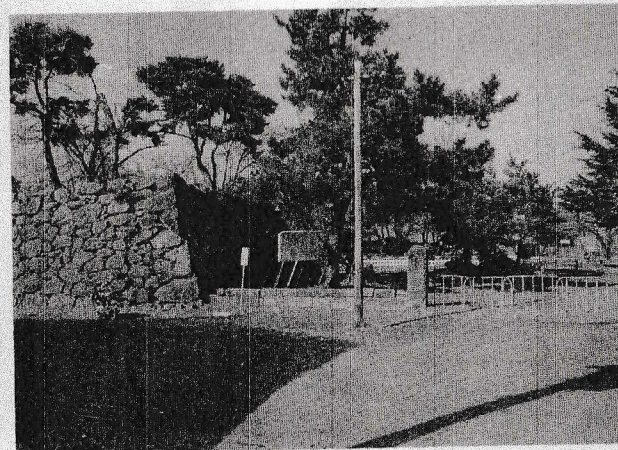
松代城は、松代町西北方にある平城である。この城は永禄の初年、武田信玄が北信濃略の最先端の策源地としてこの地を相し、はじめて築城し、同三年（西暦一五六〇年）ころ完成したものである。信玄は永禄四年九月十日の有名な川中島合戦に先き立って、諸将

氏の滅亡まで在城した。同年四月織田信長はその将森長可に与えて北信濃を鎮めさせたが、同年六月信長の死後、越後の上杉景勝ここを手に入れ、村上景国・上條宜順・須田満親等を順次城将としてここに居らせ、北信の経営に当たさせた。

慶長三年（西暦一五九八年）景勝が会津に移ってから田丸直昌、同五年から森忠政、同八年から松平忠輝、元和二年松平忠昌、同四年から酒井忠勝が城主になり、直昌の四万石領知を最小高に、忠輝の十四万石領知を最大高にこの地を支配したが、元和八年（西暦一六三二年）真田信之が上田城から移って城主となってからは、水内・高井・更級・埴科で十萬石の地を領知し、その子孫相次いで城主となった。同十代幸民の時明治維新になり、城は同四年兵部省の所管に属したが、翌々六年十月、建造物等ごとく焼失し、石塁も本丸を残して取りこわされた。武田氏が築城した当初の城の規模については詳細を欠くが、慶長の初年森忠政が城主であった時（一説に田丸直昌の時と



65 松代城跡指定地域図



64 松代城跡本丸正面の樹形石塁

とこの城に会し作戦をこらしたのをはじめとして、北信濃出陣に際して常に陣城とし、その子勝頼もしばしばここを陣城としている。当時この城を海津城と称し、守将高坂昌信が守り、天正六年昌信の死後は春日虎綱が代って守り、天正十年（西暦一五八二年）武田

いう。それまで芝土居であった本丸の土塁を石垣に改め、二の丸、三の丸を拡張修理したと伝えられているほか、城修築についての記録もないから、その規模は当初とはなほだしい変改はなかったようである。

県史跡に指定した本丸跡は、石塁の内法四十間(七・四メートル)四方の方形で、四辺には高さ二間(三・七メートル)馬路一間(一・八メートル)の石塁を回らしている。享保二年ころの古図や明治五年廢城当時の古図によると、南方中央入口には櫓形を設け、堀端に櫓門を、奥に單層櫓門があったが、今は櫓形の二部と櫓門の礎石を存しているのみである。

また東北隅にも大櫓形を設け、内方に櫓門、出口に冠木門があったが、これもくすし去って一部を残すばかりである。

このほか本丸内には、東方南寄り二の丸へ通ずる櫓門と、石塁上東南隅と西南隅にそれぞれ二層の隅櫓があった。

御代田 一里塚

信越線御代田駅の東踏切より県道佐久軽井沢線(旧中山道)を北へ二〇〇呎、右手畑中に東西に並び頂に桜の古木のある二基の高塚が見える。これが中山道の御代田一里塚で、現在は両塚の間には古道と思われるものは認めがたい。

東塚は中山道より谷地沢川を隔てて九呎の地点に存し、塚の間開

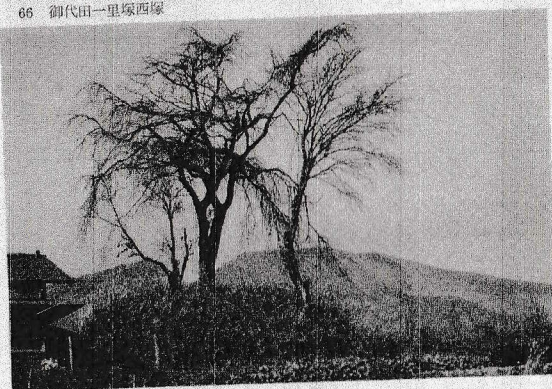
ともに改植されたものである。両塚とも一見中山道とは全く関係ない位置に、旧街道の歴史を秘めてほぼ原状の姿を残している。

中山道の開通は当地方の伝承では、文祿以降とも天正初年ともい、一里塚の設けられたのは、慶長八年のこととするが何れも信をおきたい。幕府が中山道に宿駅制をしいのは慶長七、八年ころであり、一里塚の築造は慶長九年(一六〇四)二月以後のことである。

徳川家康の命によって、同秀忠が永井白元・本多光重等を一里塚奉行に任命して中山道筋の幕府領・私領を問わず人足を徴発して街道を修理し、日本橋を基点として一里(約四キロ)ごとに道の両側に一里塚を築かせ、

塚の頂には榎などを植えて道程標となし旅情を慰め、通交の便益をはかった。その道幅は五間(九・九メートル)塚は五間平方を基準と定められたが、この地方では取りあえず従来の道路をつなぎ合せて街道にあて次第に手を加えたようである。その後幕藩体制が整って諸大名の江戸参勤がしげくなる寛永十二年(一六三五)以後、中山道も根本的に改修する必要に迫られた。この際の大改修によってこ

66 御代田一里塚西塚



67 御代田一里塚東塚



本丸内には城主の殿舎があったが、明和二年、それまで園地であったの九西の花の丸に殿舎を移し、以後城主の居所とするようになった。

二の丸は、本丸外の堀を隔てて、本丸の南および東西の三方を四角形をなして、その外方に南・東・西に櫓形と付属の櫓門があつて、さらに東・南二方の櫓形の外に丸馬出しを設け、南方馬出しのそと側に三の丸と花の丸の櫓を構え、大手門は三の丸東方に大櫓形と大御門と称する平櫓門を置いて、城内への正面入口としていた。武田氏の築城と伝わるものは県内に数多いが、松代城はその中でも代表的なものといわれている。明治初年の廢城とともに二の丸以下は取りこわされてしまったが、本丸は幸い残ることができ、他の廓以下もその規模を大略うかがうことのできるほどに形跡を留めている。

所在地 北佐久郡御代田町字一里塚
交通 信越線御代田駅

四〇呎、高さ四・五呎(東塚は五・五呎、西塚は四・五呎)塚の全面は藁と芝におおわれて、桜が二本(西塚は一本)植えられている。西塚は東塚より一七呎西西北に離れてあり、周囲四〇呎、高さ五呎(東塚は六呎)の頂面は直徑五・六呎表面は藁と芝に包まれ、頂上に三本の桜(西塚は一本)が植えられている。二の丸は、三の丸の南にあり、二の丸の桜(西塚は一本)が植えられている。二の丸は、三の丸の南にあり、二の丸の桜(西塚は一本)が植えられている。

の一里塚も中山道の西側に置き去りになったものと思われる。

中山道はここから小田井宿を経て鶴岡沢端一里塚(東塚)に至り、岩村田荒宿・八日市場を経て、平塚一里塚を過ぎ、塩名田宿より御馬寄一里塚・芦田村一里塚に通じていた。幕府では街道の改修ごとに一里塚の位置を移さず、従来の塚を利用する方針だったので、この御代田一里塚は却って安泰にその遺構を今日に伝えたもの